

---

---

原著論文

---

---

## 健康事象以外の相談目的で保健室に来室する児童生徒の コミュニケーション・スキル特性について

中村 亜紀

Characteristic of the communication skills of the children who confide a trouble to Yogo teacher

Aki Nakamura

Purpose: The child student often talks about a trouble with a parent and a friend, a teacher. The child student of the constant ratio talks about a trouble with a yogo teacher. I determined the characteristic of communication skills of the child student who came to a school infirmary to talk about a common trouble with a yogo teacher. Method: I conducted questionnaire survey in female university students. The investigation item is presence or absence of experience of the consultation to a yogo teacher for them between a high school from the elementary school. And I measured a communication skills using ENDCORES. Results: The child student who came to the yogo teacher for consultation had a low self-control skill, and the decrease of the skill was found as children with much consultation. Particularly, I found that a skill of the feelings suppression was low in self-control. Discussion: For the children who come to the yogo teacher for consultation, support to improve a self-control skill is necessary.

### 1. はじめに

平成23年度保健室利用状況に関する調査によれば<sup>1)</sup>、1校当たりの1日平均保健室利用者数は小学校25.8人、中学校24.7人、高等学校26.6人となっている。保健室の来室理由で最も多いものから順に、小学校ではけがの手当て32.0%、体調が悪い11.5%、中学校では体調が悪い18.7%、けがの手当て14.0%、高等学校では体調が悪い23.8%、けがの手当て10.5%となっており、外科的または内科的な変調の理由が多い。一方で、保健室に相談目的で来室する子どもたちもいる。上記来室理由のなかで、困ったことがあるので相談したい、という来室理由があり、小学校0.8%、中学校1.5%、高等学校1.9%となっている。この割合は来室理由には体や病気のことにについて教えて欲しい、という項目が他にあるため、困ったことというのは心身以外の用件を持った相談である可能性が高い。

全国の小中学生2,143人を対象とした内閣府実施の「低年齢少年の生活と意識に関する調査」の中で、困ったことや悩みの相談相手が調べられている<sup>2)</sup>。複数回答で、相談相手として最も多いのは、お母さん64.8%、同性の

友達58.7%、お父さん29.5%、学校の先生18.7%の順になり、保健室の先生は4.9%となっている。多くの子ども達は困りごとが起こった際には家庭で、そして教室内外で友人や教諭へ相談をしていることになる。しかしながら学校の中でも、教室を出て保健室という場で養護教諭へも、あるいは養護教諭だけにという場合もあるだろう、相談したいと望む児童生徒がいるということがわかる。

日本学校保健会は保健室登校を「常時保健室にいるか、特定の授業には出席できても、学校にいる間は主として保健室にいる状態をいう」と定義している<sup>1)</sup>。教室へは入れないものの、保健室へは通うことが出来、不登校に至らない子どもや、不登校から学校へ行けるようになった子どもが教室へ戻るまでの“充電期間”として過ごす場所として保健室が活用されている。保健室登校では、子どもが学校で過ごす時間の大半に養護教諭は付き添うことになる。教室へは入っていけないにも関わらず、子どもが保健室へは入って、養護教諭の対応の下で過ごせるのはなぜだろうか。

有村(2006)<sup>3)</sup>は保健室登校を経験した人を対象とした聞き取り調査を行い、保健室登校の教育的意義を考察する中で、養護教諭の保健室登校の子どもたちへの関りについて、共通点を明らかにしようと試みている。それによると、養護教諭は「責めない」「温かい」「無条件で

受け入れる」といった対応により、子どもは受容されたと感じ、自信や自己肯定感を高めることが出来ること、養護教諭との会話を通して、徐々に自分自身の言葉で語り始めることにより、自分自身への理解が深まること、保健室で他の生徒の様子を見聞きたり、養護教諭を介した交流を持つことで人間理解が深まっていく、といった効果をもたらしている」とまとめている。養護教諭と一般教諭とで、子どもとのコミュニケーションの取り方について比較された調査については見当たらないが、養護教諭の個別に時間をかけた子どもへの対応は、子どもに自己肯定感を高めることに寄与している。そして、養護教諭は保健室という場の特性をも生かした子どもへの関わりとコミュニケーションを確立していると言えるだろう。

保健室に相談をしに来室する子どもは、このような養護教諭とのコミュニケーションを求めて来室するのではないだろうか。そのとき、養護教諭を困りごとの相談の対象と考える子どもたちのコミュニケーションスキルに特徴はあるのだろうか。本研究では、女子大学生を対象に大学入学以前を振り返り、養護教諭への健康事象以外の相談経験の有無について調査を行った。相談経験を持つ者と相談経験のない者を比較検討し、コミュニケーションスキルの特性を明らかにしたい。また、相談に来る子どもに対応する養護教諭の教育的かかわりについても考察したいと考える。

## II. 方法

### 1. 調査時期

2015年5月, 11月, 2016年7月

### 2. 調査対象

関西にあるA大学教員養成課程に在籍する女子学生,

1~3回生を対象に無記名自記式アンケート調査を行った。

### 3. 調査内容

調査の内容は、小学校から高等学校の間の養護教諭への健康事象以外についての相談(家族関係, 友人関係, 学業等)のための保健室訪室の有無とその時期(小学校, 中学校, 高校), 頻度(1回のみ, 数回, よく行った, 保健室登校)について質問した。コミュニケーションスキルの測定にはENDCOREsを用い, 24の質問について7段階リッカートスケールでの回答を求めた。

#### ENDCOREsについて

ENDCOREsは, 藤本らにより開発されたコミュニケーション・スキル尺度である<sup>4)</sup>。藤本らはENDCOREsの前に多様なスキルを, 階層性を持ったものとするENDCOREモデルを作成している(図1)。ENDCOREモデルでは, スキルを文化・社会への適応において必要な能力である「ストラテジー」, 対人関係に主眼がおかれた社会性に関わる能力である「ソーシャル・スキル」, 言語・非言語による直接的コミュニケーションを適切に行う能力である「コミュニケーション・スキル」の3種類に分類し, スキルの最も基礎となるものがコミュニケーション・スキルとしている。そして, それらのスキルを, 文化・社会・対人・自己のレベルを縦軸に, 対象とする行動の多様性や状況の特殊性を横軸とした扇形に表している<sup>5)6)</sup>。

コミュニケーション・スキルは, コミュニケーションの対象として自己・対人・社会があることを前提として, ソーシャル・スキルと近接した高次の能力から, 自己や意思疎通に関する基礎的な能力までの次元の異なる6つの因子からなる内部構造を持つとしている。自己統制は自己に方向づけられた因子であり, これを基盤とし

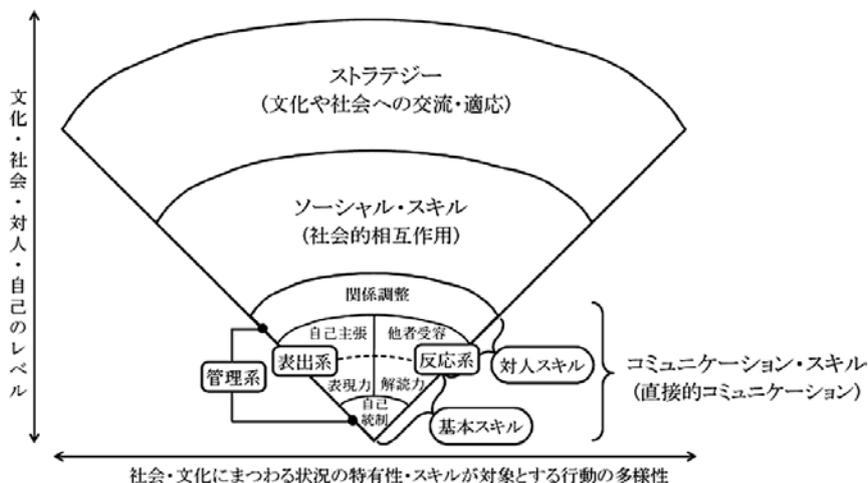


図1 ENDCORE モデル スキルの扇

藤本 学 コミュニケーション・スキルの実践的研究に向けた ENDCORE モデルの実証的・概念的検討より引用

たその上に、コミュニケーション行動の基礎となる言語的な能力である表現力、読解力の2つの因子を加えたものが基本スキルを構成する。表現力、読解力に対応する上位因子である自己主張、他者受容の2因子と集団内の人間関係およびコミュニケーションに働きかける能力である関係調整の3因子が対人スキルを構成している。各因子はそれぞれ4種類のサブスキルから構成され、サブスキルごとに得点化される尺度が ENDCOREs であり、高得点ほどコミュニケーションスキルが高いことを示す(図2)。

藤本らは、ENDCOREs の6因子の得点の高低のパターンから8つのコミュニケーションスキルタイプがあることも見出している<sup>7)</sup>。すべての能力が平均値を大きく上回る万能型を頂点、すべてが平均値を大きく下回る回避型を底辺として、表現力と自己主張(表出系スキル)が高い3タイプ〔能動型・受動型・主体型〕と理解力と他

者受容(反応系スキル)が高くなる3タイプ〔自制型・我執型・凡庸型〕の2系統に分かれる。

ENDCOREs は2004年に開発されて以降、更にモデルの最適化が進められている一方で、ある属性を持った集団のコミュニケーション・スキルを検討するといった実践的な研究にも使われるようになってきている。

#### 4. 分析方法

分析は保健室での相談経験の有無、相談時期、相談頻度によりコミュニケーションスキル総得点の差の検定、ENDCOREs の6つの因子における得点の差について Kruskal-Wallis 検定を行った。またサブスキルについても同様に検討を行った。

次に、藤本らによる ENDCOREs の6つの因子得点の高低のパターンによって8つに分けられたコミュニケーションタイプへの当てはまりを明らかにした。各因子得点をその平均値から  $>+2SD$ ,  $>+1SD$ ,  $>+0.5SD$ ,

サブスキル	項目文
<b>自己統制 (管理系基本スキル)</b>	
欲求抑制	1 自分の衝動や欲求を抑える
感情統制	2 自分の感情をうまくコントロールする
道徳観念	3 善悪の判断に基づいて正しい行動を選択する
期待応諾	4 まわりの期待に応じた振る舞いをする
<b>表現力 (表出系基本スキル)</b>	
言語表現	5 自分の考えを言葉でうまく表現する
身体表現	6 自分の気持ちをしぐさでうまく表現する
表情表現	7 自分の気持ちを表情でうまく表現する
情緒伝達	8 自分の感情や心理状態を正しく察してもらう
<b>読解力 (反応系基本スキル)</b>	
言語理解	9 相手の考えを発言から正しく読み取る
身体理解	10 相手の気持ちをしぐさから正しく読み取る
表情理解	11 相手の気持ちを表情から正しく読み取る
情緒感受	12 相手の感情や心理状態を敏感に感じ取る
<b>自己主張 (表出系対人スキル)</b>	
支配性	13 会話の主導権を握って話を進める
独立性	14 まわりとは関係なく自分の意見や立場を明らかにする
柔軟性	15 納得させるために相手に柔軟に対応して話を進める
論理性	16 自分の主張を論理的に筋道を立てて説明する
<b>他者受容 (反応系対人スキル)</b>	
共感性	17 相手の意見や立場に共感する
友好性	18 友好的な態度で相手に接する
譲歩	19 相手の意見をできるかぎり受け入れる
他者尊重	20 相手の意見や立場を尊重する
<b>関係調整 (管理系対人スキル)</b>	
関係重視	21 人間関係を第一に考えて行動する
関係維持	22 人間関係を良好な状態に維持するように心がける
意見対立対処	23 意見の対立による不和に適切に対処する
感情対立対処	24 感情的な対立による不和に適切に対処する

図2 ENDCOREs の項目内容

藤本 学 コミュニケーション・スキルの実践的研究に向けた ENDCORE モデルの実証的・概念的検討より引用

>SD, <SD, <-0.5SD, <-1SD, <-2SD のランクに分け、クラスター分析を行い、各タイプへの該当状況を確認するとともに、保健室訪室の経験の有無、相談の時期によりコミュニケーションタイプの構成比に差があるかについて独立性の検定により検討を行った。

分析には SPSS Statistics 22 を用いた。

### 5. 調査における倫理的配慮

倫理的配慮として、実施に当たっては調査の目的、協力への自由意志の尊重、個人を特定するものではなくプライバシーは保護されること、得られたデータは研究目的以外で使用しないことを説明し、了承の場合に回答するように依頼して回答を得た。

## III. 結果

アンケートは 254 名から回答が得られた。分析には欠損値のない 245 名を用いた（有効回答率 96.5%）。

### 1. 養護教諭への相談の状況

小学校から高等学校の在学中に健康事象以外で養護教諭に相談をした経験のある者は 93 名（38.0%）であった（表 1）。相談時期は、複数回答で小学校時 21 名、中学校時 45 名、高等学校時 53 名であり、高等学校時に相談を行った者が多く、小学校から高等学校まですべての時期で相談を行う機会があった者が 8 名あった。相談頻度は小学校・中学校・高校のいずれかの時期に 1 回だけ相談の機会があった者が 17 名、数回あった者が 40 名、よく行った 28 名、保健室登校を経験したものが 8 名であった（表 2）。相談事象について相談先が養護教諭のみであったのが、13 名（14.0%）、養護教諭に加え、一般教諭も含めた他の人へも相談できていたのが 27 名（29.0%）、一般教諭は含めないが、養護教諭と家族を含めた他者へも相談できていたのが 34 名（36.6%）、一般教諭や家族を含めず養護教諭と友人に相談をしていたのが 15 名（16.1%）であった（表 3）。健康事象に関わらないことについて、一般教諭や家族へは言わない相談を養護教諭にしている生徒がいることが示された。特に保健室登校の経験を持つ者の半数は養護教諭へのみ相談が行えたとしており、一般教諭へも相談できていたのは 25%であった。

### 2. ENDOCOREs 得点比較

全体での ENDOCOREs の総得点平均は 26.9 (S.D±3.74)、各スキルでは自己統制 4.57 (S.D±0.81)、表現力 3.94 (S.D±0.95)、解読力 4.47 (S.D±0.96)、自己主張 3.86 (S.D±0.93)、他者受容 5.12 (S.D±0.91)、関係調整 4.65 (S.D±0.89) であった。大学生を対象とした ENDOCOREs の調査では、大坊らが行った大学生 1889

表 1 相談の時期

時期	人	(再掲)			
小	21 (22)	小中 5 (5)	中高 11 (12)	小中高 3 (3)	小高 1 (1)
中	44 (47)				
高	51 (55)				

( ) 内%

表 2 相談の頻度

1 回	数回	よく行った	保健室登校	計
17	40	28	8	93

表 3 養護教諭以外の相談者

	人	%
養護教諭のみ	13	14.0
養護教諭+教諭への相談あり	27	29.0
(内訳) +教員	8	8.6
+教員・家族	6	6.5
+教員・友人	4	4.3
+教員・家族・友人	9	9.7
養護教諭+家族への相談あり	34	36.6
(内訳) +家族	21	22.6
+家族・友人	12	12.9
+家族・親戚	1	1.1
養護教諭+友人への相談あり	15	16.1
不明	4	4.3
計	93	100

人を対象とした調査<sup>7)</sup> が最も多数であるが、そこでの各スキル平均は自己統制 4.84、表現力 4.21、解読力 4.97、自己主張 4.17、他者受容 5.37、関係調整 4.95 であるのと比較して、本調査の対象は全てにおいて低い値を示していた。

総得点、基本スキル得点、対人スキル得点について、相談経験の有無、相談の時期、相談頻度により比較検討を行った。相談の時期は、小学校時の相談の有無、中学校時の相談の有無、高等学校時の相談の有無について見ている。このとき総得点と基本スキル得点は正規性が認められなかったため、Kruskal-Wallis 検定を、対人スキル得点は正規性が認められたので one-way ANOVA を行っている。この検討ではいずれにも有意差は見られなかった。

表 4 養護教諭への相談経験の有無とその時期による ENDCOREs 得点の比較

	全期間			小学校			中学校			高校		
	相談あり	相談なし	p	相談あり	相談なし	p	相談あり	相談なし	p	相談あり	相談なし	p
n	93	152		21	224		44	201		51	194	
自己統制	4.47 (0.81)	4.63 (0.80)	*0.044	4.30 (0.78)	4.60 (0.81)	0.83	4.44 (0.88)	4.60 (0.79)	0.098	4.47 (0.84)	4.60 (0.80)	0.243
表現力	4.00 (1.02)	3.90 (0.90)	0.243	3.98 (1.23)	3.93 (0.92)	0.685	4.14 (1.14)	3.89 (0.90)	0.105	3.80 (1.06)	3.97 (0.92)	0.505
解読力	4.79 (0.92)	4.72 (0.99)	0.433	4.60 (1.01)	4.78 (0.96)	0.309	4.78 (1.02)	4.75 (0.95)	0.994	4.80 (0.84)	4.74 (0.99)	0.432
自己主張	3.91 (0.96)	3.84 (0.91)	0.438	3.88 (1.16)	3.87 (0.90)	0.673	4.02 (1.04)	3.83 (0.90)	0.318	3.71 (0.97)	3.91 (0.91)	0.281
他者受容	5.17 (0.84)	5.09 (0.95)	0.608	5.03 (0.76)	5.14 (0.92)	0.542	5.32 (0.91)	5.09 (0.90)	0.165	5.06 (0.77)	5.15 (0.94)	0.391
関係調整	4.69 (0.90)	4.62 (0.88)	0.488	4.61 (0.83)	4.66 (0.90)	0.791	4.79 (0.91)	4.62 (0.89)	0.275	4.66 (0.93)	4.65 (0.88)	0.909
基本スキル	13.26 (1.91)	13.26 (2.03)	0.877	12.87 (2.11)	13.30 (1.98)	0.317	13.36 (2.13)	13.24 (1.96)	0.750	13.07 (1.89)	13.32 (2.01)	0.577
対人スキル	13.78 (2.02)	13.53 (2.17)	0.531	13.52 (2.00)	13.66 (2.13)	0.566	14.13 (2.18)	13.54 (2.09)	0.186	13.43 (1.89)	13.71 (2.17)	0.419
総得点	27.04 (3.49)	26.81 (3.89)	0.705	36.39 (3.86)	27.0 (3.75)	0.366	27.50 (3.81)	26.78 (3.74)	0.373	26.50 (3.30)	27.02 (3.86)	0.339

\*Kruskal-Wallis test &lt; 0.05

注 ( ) 内は標準偏差

表 5 養護教諭への相談頻度による ENDCOREs 得点の比較

n	自己統制	表現力	解読力	自己主張	他者受容	関係調整
相談なし 152	4.63 (0.80)	3.90 (0.90)	4.72 (0.99)	3.84 (0.91)	5.09 (0.95)	4.62 (0.88)
1 回 17	4.29 (0.96)	4.16 (0.88)	4.93 (0.88)	4.01 (1.07)	5.38 (0.80)	4.78 (1.04)
数回 40	4.71 (0.72)	4.02 (1.02)	4.83 (0.92)	3.94 (0.93)	5.29 (0.83)	4.75 (0.94)
よく行った 28	4.38 (0.85)	4.09 (0.96)	4.88 (0.96)	3.99 (1.02)	5.03 (0.93)	4.70 (0.87)
保健室登校 8	3.88 (0.40)	3.28 (1.44)	4.21 (0.81)	3.38 (0.73)	4.84 (0.48)	4.28 (0.51)

\*Kruskal-Wallis test &lt; 0.05

\*多重比較

注 ( ) 内は標準偏差

### 3. ENDCOREs 因子得点比較

自己統制において、相談の有無の比較で、相談経験のある者に得点が有意に低いことが認められた。また、相談時期についてはいずれの時期の相談の有無、いずれの因子にも有意差はみられなかった。相談頻度では自己統制において有意差がみられ、多重比較の結果、相談経験の無い者と保健室登校の経験がある者、及び、数回の相談経験がある者と保健室経験のある者とに有意差がみら

れ、保健室登校の経験がある者は自己統制スキルが低かった。

### 4. ENDCOREs サブスキル得点比較

自己統制は欲求抑制、感情統制、道徳観念、期待応諾の4つのサブスキルからなる。これらを相談経験の有無、相談頻度により比較したところ、感情抑制の得点が相談経験ありで有意に低く (p=0.013)、相談頻度でみると多重比較で相談経験のない者と保健室登校の経験がある

者で保健室登校経験のある者の感情抑制の値が有意に低かった ( $p=0.021$ )。また、表現力は言語表現、身体表現、表情表現、情報伝達のサブスキルからなるが、表情表現が相談経験ありで有意に低く ( $p=0.013$ )、相談頻度では差はみられなかった。

#### 5. スキルタイプの検討

8つのスキルタイプが最も出現するクラスターの探索を行い、6クラスターに分けられた。万能型22名(9.0%)、能動型42名(17.1%)、受動型45名(18.4%)、表現力及び自己主張低下型34名(13.9%)、凡庸型88名(35.9%)、回避型17名(6.9%)であった。スキルタイプのうち、主体型、自制型、我執型は出現せず、表現力及び自己主張低下型が見いだされた。相談経験の有無、相談頻度でスキルタイプの出現割合を独立性の検定で検討を行ったが、有意な差は見られなかった。

### IV. 考察

養護教諭への相談状況について、保健室利用状況に関する調査では、調査期間中の保健室来室者の中での来室理由として約1%が健康事象以外での相談目的となっている。これは延べ人数での割合であるので、繰り返しの訪室があることを考慮すれば、実人数は更に少なくなるだろう。本調査での相談経験を持つ者の割合は38%であり、一般大学生を対象とした場合と比較して高い割合であると推測している。これは調査対象者の中に養護教諭養成課程の学生を含んでおり、養護教諭養成課程の学生のうちには高等学校までに養護教諭との関りを持ったことをきっかけとして養護教諭を目指すという者が多くみられるため、この割合が高く得られたと考える。相談状況からは、養護教諭へ相談に行く子どものうち30%はその他の大人に相談を行っていないことが分かった。相談時点での困りごとについて、その内容は問わなかったが、特に深刻な問題になる場合に養護教諭がいなければ解決に向けて大人が介入する機会を失うことにもなり、養護教諭は子どもが他には相談できない事柄について相談できる教員となっていることの存在意義は大きい。

ENDCOREsの因子得点では、本調査での対象は男女を含む一般大学生の値として得られる大坊らの調査結果と比較してすべての因子で低値を示していた。これは本調査対象が全般的なコミュニケーション・スキルの低さを示しているが、本調査が女子学生のみを対象としたために示された可能性もあると考えている。因子の総得点、基本スキル得点、対人スキル得点は養護教諭への相談経験の有無、相談の時期、相談頻度により差は見られなかった。全般的なスキルの差は確認できなかったため、

因子別に差の検討を行ったところ、相談経験のある者は自己統制が低く、相談頻度では保健室登校の経験を持つ者がより低いと示された。その他の因子では差は見られなかった。

ENDCOREsにおける自己統制とは、他のスキル尺度では「統制」(ENDE2)、「情緒的コントロール」(SSI)、「自己統制・自己抑制・曖昧さ耐性」(JICS)、「自己呈示変容能力」(RSMS)と同義に得られるものとしている<sup>9)</sup>。しかし自己統制についての定義は多様である。塚本(1995)が多様な定義に共通する点として、①外的な強制、援助が欠如している、②生起確率が低い、したくない行動をする、③自ら、意図的に行う、を挙げており<sup>8)</sup>、このことから自己統制スキルとは、子どもが親や教師などの直接関与する外的な統制が無い中で、魅力的とは思わない、したくない行動を感情をコントロールしながら自ら自律的に行うためのスキルであると理解する。

自己統制と心理的健康の関係について、金子ら(2010)<sup>9)</sup>は自己統制スキルが低く、自分自身の感情をコントロールする度合いが低いと、不安や抑うつ気分が高まり、不機嫌や怒りを持つ程度が高まるとしている。また、前田ら(2017)<sup>10)</sup>はコミュニケーションスキルとソーシャルサポートがQOLに及ぼす影響についての研究で、自己統制スキル、自己主張スキル、表現力スキルが高い大学生はQOLの心理的領域の満足度が高く、それは自己の感情を適切にコントロールし、適度な自己主張を行うことが自己満足感を高め、心理的な不健康感を低減すると分析している。低値の場合はその逆の反応となろう。養護教諭に相談経験を持つ群は自己統制スキルが低いために心理的不健康感を抱きやすい可能性がある。さらにENDCOREモデルでは、自己統制スキルはコミュニケーション・スキル内における基礎部分であり、ソーシャル・スキルから戦略に発展するための要部分に位置付けられるものである。このスキルの獲得なしには上位のスキルの安定した獲得は困難が生じることが危惧される。

自己統制スキルが低いことについて、大江ら(2015)<sup>11)</sup>は文献研究により、自己統制にはメタ認知的モニタリングが重要だとしている。メタ認知とは記憶や思考などの認知過程を認知する高次の認知機能であり、思考などの認知活動をしている自分をもう一人の自分が俯瞰的に見ているというイメージだという。メタ認知能力が低いほど、必要な情報を察知できず、視野の狭い短絡的・感情的・主観的な判断行動をしやすく、情動から距離を置く態度と注意喚起が情動抑制につながると述べている。ENDCOREsの得点に戻れば、各因子におけるサブスキルでは、相談経験を持つ者は自己抑制のサブスキルであ

る感情抑制が低値であり、また表現力のサブスキル表情表現が低値であることから情動コントロールに対する育ちの支援が必要であることが分かる。感情（情動）抑制が効かない場合、極端には非行といった行動になっていくが、多くの子どもたちの場合は狭い視野の中で心理的な傷つきをみせているのだろう。子どもの養護教諭への相談場面では、養護教諭は子どもの語りとその対応によりメタ認知を助けている可能性があることを自覚しながら相談を効果的に行っていく必要がある。またスキル向上のためのトレーニングも開発が試みられており、養護教諭も開発及び運用への参画が期待される。

本研究では、データ収集にあたり以下の限界がある。小学校から高等学校在学中という過去の時点での行動に関与したと思われるコミュニケーション・スキルを大学生時点でのコミュニケーション・スキルの測定結果を当てはめて推察しようとする点である。コミュニケーション・スキルは経験とともに向上するものであり、今回事象の発生とした養護教諭への相談時期が早いほど、その後のコミュニケーション・スキルの向上について個人差が生じている可能性がある。今後の課題としては、事象発生から調査までのコミュニケーションスキルの向上がほぼ一定であると仮定できる程度の多数例を得て、個人差の影響を回避した検討を更に行う必要がある。

## V. 謝辞

本研究を行うに当たっては、本大学の卒業生である澤知奈美さん、鎌田奈歩美さんとは初期から検討を共にし、協力いただきましたこと深謝いたします。また、アンケート調査に協力下さった女子大学生の皆さんへ感謝いたします。

## 参考文献

- 1) 「平成 23 年度調査結果 保健室利用状況に関する調査報告書」, 日本学校保健会, 2013.
- 2) 「低年齢少年の生活と意識に関する調査」, 内閣府,

2007.

- 3) 有村信子, 「保健室登校の教育的意義—保健室登校を経験した人への面接調査の分析—」, 鹿児島純心女子短期大学研究紀要, 2006, 第 36 号, 19-34.
- 4) 畑中美穂, 「コミュニケーション・スキル尺度 ENDCORES」, 吉田富二雄, 宮本聡介 (編) 『心理測定尺度集 V 個人から社会へ〈自己・対人関係・価値観〉』, サイエンス社, 2011, 272-277.
- 5) 藤本 学, 大坊郁夫, 「コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み」, 日本パーソナリティ心理学会, 2007, 第 15 巻第 3 号, 347-361.
- 6) 藤本 学, 「コミュニケーション・スキルの実践的研究に向けた ENDCORE モデルの実証的・概念的検討」, パーソナリティ研究, 2013, 第 22 巻第 2 号, 156-167.
- 7) 藤本 学, 「スキルとしてのコミュニケーション」, 大坊郁夫 (編) 『幸福を目指す対人社会心理学-対人コミュニケーションと対人関係の科学』, ナカニシヤ出版, 2012, 193-210.
- 8) 塚本伸一, 「子どもの自己統制に関する心理学的研究の動向 (1)」, 上越教育大学研究紀要, 1996, 第 15 巻第 2 号, 305-322.
- 9) 金子和弘, 今井有里佐, 加藤孝央, 常本智史, 城圭子, 「アサーション行動尺度における信頼性・妥当性の検討」, 生活科学研究, 2010, 32, 57-66.
- 10) 前田由貴子, 大島 叶, 佐藤 寛, 「大学生の QOL に及ぼすコミュニケーションスキルとソーシャルサポートの影響」, 国際研究論叢, 2017, 30(3), 147-155.
- 11) 大江由香, 亀田公子, 「犯罪者・非行少年の処遇におけるメタ認知の重要性—自己統制力と自己認識力, 社会適応力を効果的に涵養するための認知心理学アプローチ」, 教育心理学研究, 2015, 63, 467-478.